

五三會

広島工業大学 建築学科 同窓会

第6号 昭和54年版



も く じ

五三会の皆様へ	菅原 辰幸	2
学生気質今昔	橘 節司	3
雑 感	加藤 恵子	4
紙の上をエンピツが走る	岡村 俊一	4
徒然に	生田 文雄	5
to be or not to be	佐々木正治	6
ある出会い	新宅 英治	7
今思うこと	平川 長義	8
表現から現象へ	松原 秀範	8
市民と住宅	背尾 宜徳	9
今思う事	市山 盟子	10
就職するにあたって	木村 仁美	11
昭和54年3月卒業予定者就職先一覧表		12
学科別卒業生数の推移		15
第4回五三回コンペ入選発表	渡辺 武彦	16
第5回五三会コンペ作品募集		17
昭和52年度決算報告、昭和53年度予算		18
第6回総会のお知らせ		19
広島工大建築学科教員及び非常勤講師名簿		20
役員の変遷		21
五三会のうごき	金堀 一郎	22
会員へのお知らせ		24
編集後記		24

五三会の皆様へ

「五三会」会長

四十四年卒

菅原 辰幸

五三会が発足して、はや六年が過ぎようとしています。過去の五年間は、広島工業大学建築学科卒業生が多くなり散りちりになってしまわないうちに早く組織固めをしようと努力されてきたわけです。

これからも、建築学科卒業生の多数の方々に、この会の存在価値を認めていただけるような会に発展させるべく努力がなされなくてはならないものです。

現状の五三会には、不満足な面も多々あるようですが、卒業生の皆様はどのような評価をなさっているのでしょうか。

現在、活動の柱となっているのは次のようなものです。・総会、・会誌発行、・卒業生と在学生との懇談会、・大学祭期間を利用したOB祭、・見学会、・五三会コンペ

これらは、五三会の発足当時から目標としておりましたところの、会員の親睦及び共助と会員相互の質的向上という二本柱を具体化した活動であります。

す。発足当時は資金及びエネルギーの制約により、総会を開催して親睦を図り、会誌を発行することにより情報交換を行うことを出発としたもので、次年目においては、在学生との懇談会を加え、三年目には、見学会及び学校での新入生オリエンテーション時に二、四名の卒業生を送り、体験談や学生時代の姿勢等を混じえた話を行い始めた。（これは、五十三年度より学校行事に組み込まれました。建築学科では、学校が二名分、五三会が二名分の旅費の分担をしている。）また、OB祭と五三会コンペを加えて現在の活動が行われているものです。

五三会の活動は、役員の奉仕によって支えられている現状であります。会の発展は会員個々の意識によって支えられているものであることを認識していただきたく思う。自分達を代表する組織の良否は、何らかの形で個々にはね返ってくるであろうと考えられるのです。こう考えると、五三会がどのような活動に主眼を置かねばならないのか、会員諸氏にとって重要な問題となり、慎重に検討する必要があるのです。

今後、大きな柱に、卒業生の親睦を図り、全会員を包み込める活動と、会員及び在学生の質的向上を図る活動の二つを設定しているのですが、具体的な活動は会員諸氏の自発的な活動への参加にあるわけです。

の参加にあるわけです。

会長として、会員諸氏に各自の最も得意とする活動及び意義を感じる活動への積極的な協力を期待するものです。また、個々の事情もあらうかと思えますので、会費納入及び住所連絡だけでも是非お願いいたしたく思っております。

話は変わりますが、建築学科一期生が卒業して十年が過ぎようとしているもので、この十年間、同期の諸氏にとって非常に苦難な期間であったこと推測いたします。仲間は少なく、もちろん助け励ましてくれる先輩もいなかったわけです。歯を食いしばって頑張った成果が現われてきていることを耳にする今頃です。そんな時、非常にうれしく、また力強く感じております。「親ガメこければ皆こける」の言葉通り、後に続く後輩の為に先輩が転倒しないよう一層の前進を期待しているものです。「よき先輩を持って幸せだ」という後輩の声が聞けるよう共に励もうではありませんか。

一期生の皆さん、後輩達が期待していますよ。また、現在の五三会会員の皆さんは全てが広島工大建築学科をリードしていく集団です。後輩がたずねていった折は指導の程をよろしくお願い致します。最後に、会員諸氏の御健闘を願って終りにいたします。

広島工大建築学科勤務

学生気質今昔

広島工業大学
建築学科講師

橘 節司

建築学科の第一期生が三年次生であったときの秋、私は講師として工大に席を得た。以来、早いもので既に足掛け十一年目になり、二千人をこえる学生を送り出したことになる。

「十年一昔」と云うが、我が工大建築学科の学生気質の変化は大きく、初期の頃と今とは、同じ大学とは思えぬ程、大きく違っている。この場合の気質とは、成績・人間性を含めたトータルな人間像をいう。

その変化の最たるものは、確かに入試における最低合格点は比較ならぬ程上った。それに反比例するように、個性豊かな・人間的魅力のある学生が減り、面白味のある・ユニークな学生が居なくなってしまうた。

私は、初期の活気のあった工大の方が好きである。楽しくもあり張り合いもあった三・四期生頃迄のことを思い出し、現在との比較をしてみようと思

う。

・顔と名前

三・四期生位迄は、A・Bに関係なくほとんど全員の顔と名前が一致する。それだけ学生と教師との接触が多かったからで、決して記憶力の問題でないことは断言できる。講義時間以外（以内でも？）には、研究室は学生で一杯であったし、何やかやと出入りは激しかったものである。従って研究室での仕事はほとんどできなかった。

研究室が静かになり、勉強ができるようになったのは何時の頃からであったろうか？。一日中開放でなく、鍵を掛けるようになったのは？。

今では、ゼミの学生すらあまり出入りしなくなっている。従って、名前を覚えていたのは、自分のゼミの学生と女子学生、それに余程特徴があるか問題児位迄で、全体の1/5位であろうか。いやそれ以下かも知れない。

・コンパのこと

私が飲み助でコンパが好きなので、特に感ずるのかも知れないが、年毎にコンパの機会は少なくなっていく。クラスコンパの話など、こゝ七・八年間いたことがなく、精々ゼミ・クラブ単位で、結成時・忘年会・追いコン位で

はないのだろうか。

それに反して昔はよく飲んでいた。

誰れかが云い出し、何のかのと理由を付けては、最底月一回はやっていたような気がする。そしてグループでやるにしても非常に解放的で、別にそのグループに属していなくても、同窓意識の基に自由な交流があった。何の関係もないグループに招かれても、気楽に応ずることの出来る、誰れでも参加できる雰囲気があった。思えばそれが、学生の名前を覚えるチャンスでもあったので、よく覚えられたのであろう。

初期の頃の学生との思い出の中には、勉強に関するものは全く無いといつていい。飲んだり旅行したり、とにかく遊んだ思い出しかない。

近頃は皆、会社での中堅層として、中には経営者としての責任ある立場になる年令となったので、初期の連中と会う機会・飲む機会が少なくなったのが残念であるが、あの頃の事はいつ迄も忘れないであろう。

・現代学生気質

今の学生に感ずることは、第一に個性のなさや積極性の欠落である。これは世の中一般的な傾向であるので、わが校もその例外ではあり得ないのかも知れないが、少くとも建築学科の学生

であり、建築を志す者にとっては、個性と積極性とは絶対に欠かすことのできない資質であると思う。自ら求めて自ら道を開くこと。他人にはできない自分だけのものを持つこと。それが今の学生には見られない。

人間、昔のことを懐しむようになったら年だと云われるけれど、今と昔のあまりの違いに戸惑いすら感ずるこの頃である。もうあの頃のような雰囲気は帰って来ないであろう。

どんな大学かもわからぬところに飛び込んで行った初期の学生と、受験競争に疲れ果ててナキガラとなってしまう今の学生とは、素材からして全く違うのであるから、私も考え方を変えなくてはならない。そしてそれは決して愉しいことではなく、淋しい思いなのである。

どうも愚痴っぽくなって申し訳けありません。五三会の皆様、どうか元気で頑張ってください。そして時々は顔を見せて下さい。

又、一緒に飲みましょう。

雑 感

四十五年卒 加藤 恵子

はじめに、私が工業大学を卒業してからの事についてふれてみたいと思います。

昭和四十五年四月、鹿島建設・設計部へ入社しました。当時は、何もかも教わる事ばかりで、上司との共同作業は、ずいぶん足手まといな思いをさせた事だと思えます。それでも、自分に担当させてもらった一部分の設計作業に大きな喜びを感じたものです。そうしているうちに、三越の現場が始まり、工事現場で施工図の作成をする事になりました。各セクションの苦勞により実物大の建物が出来上がる過程は、今まで設計室での何百分の一の設計作業に比べてより以上に建物を作っているのだという感動を受けたものです。工事現場では、早朝から深夜までのきびしい労働でした。そういった時期に、一級建築士の試験があり、又、こういう時が一番良く働き勉強もしました。その頃、同級生の加藤と生活をする事になり、長男誕生と同時に退社し、私名義の設計事務所を設立しました。幼児をかかえた女性の私にできる仕事は限られたものです。しかし、三年間の経験は主人が独立した現在の事務所の運営に役に立つ事ばかりでした。

設計の仕事にたずさわって十年近くなりますが、その経験の中で得た考えを少し述べてみたいと思います。

「設計する」という事は、自分で土を練りあげ、手を汚し、その中から自分の形を作り上げるといった地味で泥臭い行為のように思えます。今まで存在しない無の中から新しい形を次々と造りあげる行為は、いつも新鮮で私を夢中にさせるものです。創造の根底となるものは、設計活動以前の行為、つまり基礎芸術の積み重ねの上にたつ良い目を持ち、良いものに感動する日々の生活鍛練ではないかと思ひ、私の最も大切にしている事です。

私は数年前から洋画を始めました。我流なもので自由奔放な作品となりますが、自分のものが少しでも表現できればと思ひます。今年初めて県美展に入選し励みになりました。これからも少しずつ努力を重ねていきたいと思ひます。

末の子も来年は三才です。だんだんと育児の手もかからなくなり、自分の時間が持てる事だと思ひ楽しみにしている今日この頃です。

カトウ建築設計事務所勤務

紙の上をエンピツが走る

四十六年卒 岡村 俊一

在学中四年間、サッカー部に籍を置いていた。サッカーの試合は、キックオフの後、グラウンド上を二十二人のプレーヤーが一個のボールを追って動き回るのである。

ある一人のプレーヤーを試合中追いつけてみると、グラウンド上におもしろい幾何学模様を描くのである。スタープレーヤーは大変バランスの良い模様を描くし、大根プレーヤーはアンバランスな模様を得意(?)としているのである。サッカーの試合において、個人個人を見ていると大変良いプレーをしているのであるが、終了後スコアボードを見ると、負けているという場合が大変多いのである。つまり、部分的には良いが、全体としての統一感がないということである。監督は個々のプレーヤーの特徴を十分把握し、いかにして素晴らしいチームワークを作り上げるかという使命をもっている。

建築においても同様な事が言えるのではないだろうか。ディテールにおいては、素晴らしいデザイン、そして空間を作り出しているが、全体を眺めると、何か、どこかしらアンバランスであるという作品が少なくはないと思う。紙の上でエンピツを走らせる事によっ

て、或る設計図が出来上っていくのである。(もちろん、作者の意図を通してのことではあるが) エンピツを動かす場合、常に周囲を注意し全体を把握しておかなければならない。

いくら良いプレーをしても、観客は拍手を送ってくれない時もあるだろう。しかし、試合(設計)の終了後、大拍手を受けた時こそ本当の感激があるのである。或る時には、無駄な動きをすることによって、観客(施主)を「アッ」と言わせる様な、意外な方向に展開させる場合もある。つまり、二十二人のプレーヤーと同じ様に、一本一本の線が、つながったりからまったりして、デザインを構成していくのである。

良い試合(設計)を行う為には、十分な準備が必要である。設計者はプランを始める前に、まず、そのビルに住む人々のことを考え、彼らがどんなふうにあるまい、そして、それが何故であるかを見つつけようとする。人々の行動は、ある程度まで現在の建物によって規制されるだろう。現況における圧力を取り除き、施主の目的をもっと明確にできる様な建物を生み出すのが、我々の仕事ではないだろうか。

「人生はドラマ」である様に、サッカーもドラマであり、また、建築プランニングもドラマではないだろうか。これからも、ますます、一本一本の線を大事にしていきたいと思う。そして、

素晴らしいスタープレーヤーを目指して、観客(施主)からも絶大なる喝采を浴びたいものである。

榊杉田三郎建築設計事務所勤務

徒然に

四十七年卒

生田 文雄

同窓の皆様いかがお過ごしでしょうか。昭和四十七年に卒業し、広島市役所へ勤務して以来、はや七年目が過ぎようとしています。現在、広島市役所には二十五名の同窓の仲間がおり、市役所内でも出身校別では、一番の二世帯ですが、ここ三年間は新しい卒業生が入ってこないのです。すこし残念です。

さて、私は営繕課を経て、現在住宅建設課で勤務しています。課の業務の内容は、公営住宅の建設計画及び設計、既存住宅の改善、旧木造団地の建替計画及び設計、設計監理、以上の事業の補助金等の経理事務と云った内容です。その中で旧木造団地の建替えという仕事をしています。最近、学生時代に聴講したある講義を時々思い出します。それは確か、三年の建築計画の時間だと思えますが地井先生の「戦術と戦略」という内容の講義でした。当時、その講義を聞いて感銘を受けたという訳ではありませんが(失礼)、なんととはなしに聞いていた内容が不思議にもふ

と思い出されます。これは私の今の仕事の内容とも関連があるのではないかと思います。前述しましたように私の仕事は公営住宅の建替関係ですが、もう少し詳しく説明いたしますと、現在広島市の市営住宅の管理戸数は約一万二千戸でそのうち二千四百戸の木造住宅があります。その木造住宅団地を住環境整備、土地の有効利用等を目的として今後二十年間で全て建て替えようとする事業で、木造住宅団地の基礎調査、開発手法の検討、構想計画、密度計画、施設計画、配置計画といったいわゆるマスタープランを作成して、それを実現化するための各機関との折衝及び調整を主とした業務をしています。そのような作業の中でも民間機関、住民との調整という作業が一番むづかしく、思うようにいかず、ひどい時には、今まで積み上げて来たものが全てご破算と云うこともめずらしくありません。そのような私の仕事のなかで、

自分の考えをすこしでも多く社会に具現するために、あらゆる手だてをつくして根まわしや資料を作っている日々、に、戦略とか戦術といった講義のことを思い出したのかも知れません。机の上の辞典をめくると「戦術」とは、戦争、闘争、試合などに勝つための手段、方法。という意味と解釈されています。講義の時にどのように習った

のかはつきり覚えていませんが、この両者の使い分けについて話されたように記憶しています。辞書で知る限り、建築に関しては、結果が全てという観点に立つと戦術の生き方のほうが適しているように思われます。現代は対話の時代とよく云われますが、計画に際して建築家の独断ではなかなかスムーズに事業がなし得ない時代となってきたように思われます。皆様の中にも、日影、騒音、電波障害等の問題で私と同じ思いをしておられる方も多いのではないのでしょうか。今後このような現象がますます強くなるのではないかとありますが、私は良識ある計画をもって、その実現にあらゆる戦略を駆使する戦術家でありたいと思っています。この頃です。徒然に取り留めのないことを書きましたが、最後に皆様方の御多幸を祈り、春の総会でお会いできるのを楽しみに筆を置きます。

広島市役所住宅建設課勤務

to be or not to be

四十八年卒

佐々木 正治

最近、ある所で、ある会話を耳にした。一方は、「気にいらなければ、止めればいい」と言い、他方は「気にいらなければ、直せばいい」と主張した。なんだか「鳴かざれば……」と戦国

の武将の性格を比較したのに似ているが（戦国の武将は全て「直せばいい」であったが）、こんなことは、特定の統制が抑圧された時代でない限り、どんな時代・場所でも行われる会話であろう。この会話をよく聞いていると「……である」（事実認識）、「……でありたい」（感情的希望）、「……であるべきだ」（哲学的、科学的な根拠ある意見）の三つに分けることができるように思えるが、しばしば、これらを混同している会話に出会う。

最近、「不確実性の時代」という本の題名が流行語になっている。確かに、昭和元禄とも言われた、経済の隆盛を経験することができた時代（このことも、南北問題とか言われ、批判もあったが、弱肉強食の世界経済の中で、確固たる地位を築いた」と、昭和二十年後の民主政治の基盤の上に（このことも右派・左派別れて賛否両論がある）、経済的にも精神的にも自由な文化的風土の中で、マスコミュニケーションのシステムが確立され、いろいろな人の多種多様な意見が出、私達は、消化不良に悩まされているのが事実であろう。

これらの意見は、ある経験・思想を背景としており、一方で正しい側面をもち、一方で何らかの欠点を持っているものであろう（ものの一般的存在形態＝矛盾）。ある人は「……賛成」、ある人は「……反対」と言い、それぞれ納

得できる部分があり、歴史的必然の中で（一応、科学では、原因↓結果という図式で考える）決まり、時間の流れと共に、事実の積み重ねをしている。これら情報・意見に対して、個々人は基本的に、意識的にしろ無意識にしろ、「関係する」と「断つ」で対応、判断する。同じ気に入らない状態でも、止める人（断つ）もいれば、直してゆこう（関係する）とする人もいる。五

三会に積極的に参加する人もいるし、関係ないと判断する人もいる。自由とは、最終的には、yesかnoの判断であるとも言える。ただ歴史を眺めて言えることは、政治に於ける三権分立の思想、文化に於ける流れ等を見ると、多くの意見が、自由にしかも積極的に論争される時代が、一般的に、より正しく、より発展しているようである。又、生物学でも、特化せず、正規分布を作るような状態が、適応力のある正常な社会を形成するようである。正に人、様々である。

広島県庁営繕課勤務

ある出会い

四十九年卒

新宅 英治

永島慎二との出会いは、四十八年「若者たち」であった。

「若いということとは、つまりあおいということ…… 社会とは常になんこな老人のような世界である。そこで若者たちがその時をどう過ごしたかではなく、どう生きるかが常に問題になる。」

狭い三帖のアパートに五人の若者が生活していく様を描いた作品である。何十回となく読んだ作品で、多くを学ばせてもらった。

永島慎二―漫画家、私生活の体験を作品のなかに投げこんでいる。さわやかな透明感のある描写には定評がある。漫画青年の間では神様の存在でさえある。

よく漫画は低く見られがちであるが、小説と比べたところで大差はない。ただ表現方法が違っただけで絵か文字かの違いである。漫画の好きな人なれば一度「ガロ」を読むことを勧める。苦惱している若者の姿を見ることができだろう。次の文章は「フーテン」の挿入文である。永島慎二の生きざまに何か感ずる事があれば幸いである。

『若い頃のぼくは、漫画を描くということが全部だった。漫画を描くため

だけに生きていたといえ、いえるね。何年かたって現在の自分を見ると、そこには若い頃の自分を見出しながら、いささか違ったもう一人の自分を発見するんだ。「芸術より生活が大事」などと、わかったふうなことをいつては、かなりテキトウに、ハハハなんて笑っているのだよ。それは、かなりやばいって云った感じなんだ。

若い頃一度ぼくは、死のうと真剣に考えたことがあって、行動して失敗した。その後、一度失敗しても結局オレは近いうちに、太宰治のように死ぬんだと、信じてうたがわなかった訳さ。

そんなある日、持っている何冊かの大事な漫画本をバラバラめくりながらこの本を誰に、この本をだれそれに、オレが死んだらやろうと思って見ていると、たしかあれはアンドレ・フランソワの漫画集だったと思うのだが、いつの間にかその世界にすっかり入りこんで、いろいろなことを、みんな忘れちゃっていったんだよ。そのまま何日も何日もズーッとその本のトリコになっちゃった。一週間もすると、人間ってなんておもしろい奴等なんだろうと思うようになると、死ぬこととサッパリ別れていたね。

ついこの前のことなんだけど、知り合いの若いカップルが僕の前に現われて、北海道へ二人は死に行ったんだけど、失敗して帰って来ましたと言う。

ぼくは、そくぎに何んでまた死ぬなんてくだらんことをしたんだと聞いたら、女の子いわく、みーんなつまんないからだそう。よく考えとまったくそのとおりで、世の中におもしろいことなんてありはしない。するとその言葉に對抗しえる言葉を発見できないままに、ぼくは仲人をひきうけさせられていたんだよ。

つまりぼくは今、又、何がどうなっている、どうして漫画家なのか、そうでなければいけないのか、全部こんがらがって、それでカゼなんかひいて、メチャクチャで、全然漫画を描かないでピンクフロイドを聞きにいったりして、疲れたよ、ホント。

そんなぼくでも、一つだけ確かなことがあるんだ。それは将来きつと、見る人が、べつに泣いてよろこんでくれなくとも、笑ってくれなくともいい、ただね、「人間っていいな」って思うような漫画を描きたいと思っているといることなんだ。そして、もし若い人がつまらないから死にたいと言ったら、ぼくは胸はずませて言いたいな。「この漫画を見て下さい」。きせんね。』

渡辺建築士事務所

(設計工房日AD) 勤務

今思うこと

五十年卒

平川 長義

社会という組織は、とても大きいものである。それは、小さい頃から感じていたことなのだが、今から思うと、小学から中学、それから高校、大学と経てきて、その都度、感じていた社会の枠は、どんどん大きくなっていったようである。とくに大学時代は、そろ

そろ大人の仲間入りをしていた頃ではあるし、自分自身のやりたいこと、社会に出たらこうしようという考えが、頭にぎっしりあったのだが、現実の社会というものは、その頃思っていたほど甘いものではなかった。

僕の場合は、中学から大学まで野球を続けた。そんな僕にとって言葉の区別、規律に対する価値感、大きいものだったし、それをわきまえていることに対する自信もあった。世の中はそれで通るものと、確信していたのである。しかし社会というものは、それだけではだめなのだということを、今つくづく痛感している。

まず頭をうったのは言葉使いである。職人（現在、現場員として仕事をしている）と話すのに、年上の人だからと言って敬語を使っていたのでは、どうもスムーズにいかない。一年間ぐらいは、そんな風にやってきて、これでは

いつまでたっても進歩はないと気づいたのだが、切り替えがなかなかできなかった。しかしそのうちに、人を見る目が養われてきたのか、ずるくなったのか、段々と、うちとけるようになり、また同時に、人に対する余裕というものがでてきた。

もう一つむずかしいと思ったのは、会社の先輩であり、年下という人と接する時だ。ある程度会社になれてきて、仕事ができるようになって、やはりたてるところはたて、折れるところは折れるべきであるし、かといって相手に気を使わせるほど、たてまつってもいけない。クラブ活動をしている時のように、先輩は先輩、後輩は後輩というわけには、いけないのである。社会においては、適応性がいかに必要であるかということだろう。

最後に、今改めて感じていることと言うと、いつの時代も一緒なのは、最初は球拾いをしなければならぬということだ。

僕は卒業してから今年の四月でまる四年になるが、つい最近まで、朝一番に現場に行って事務所の掃除、それがすむと、お茶くみ、夕方になると、ナベをさげて酒のつまみを買に行き、最後に現場の戸じまりをして帰るというのを日課にしていた。

社会に出て、いろんな人との出会い、いろんな失敗があったが、まだまだ素

晴らしいこと、また反対に落し穴が、これからも一杯あることと思う。しかし、結局、根本は、足元をよく見て、球拾いからであると、自分を励ましている。

山陽土建(株)勤務

表現から現象へ

五十一年卒

松原 秀範

最近「クロスオーバー」なる造語をひんばんに耳にして、あらためて自分の位置のあいまいさを知らされる。

文字通り、「交叉」「重なり合い」それを「起える」謂いであろうが、例えば音楽の場合、ジャズ、クラシック、ロック等各々のリズム、奏法、楽器の持ち味を生かしながら、ひとつの場に統合する事とある。それは各々が自己の位置を再認識し、ジャズならジャズの歴史そのものをも自ら背負いながら重ね合わせの場にひきづられてゆくあり様、いわゆる自己の中心移動、自己の参加とも云えよう。同時に、仲間同志の視線で、己れの位置を理解するなどといった精神のユートピアから、一瞬にして投げ出され、己れについて数々の弁論を強いられる場でもある。

私自身、建築そのものに関わっているという状況以前に、社会そのものに関わっているといえるほど、ジャーナ

リズムの造語を飲み込み、設計の約束事に甘んじているのだが、いざ、さっきの「クロスオーバー」なるものに出合ってみると、たちまちのうちに私なぞ吹き飛んでしまうのだ。私を私と云える根拠はどこにもない。社会は我々を何かに興じさせる為に、ピンクレディーに何々賞とかいうものを自信を持って与える。「何かに興じることがあなたの幸せへの第一歩なのだ。」と。

「人間は、理性||良識を正しく使い、真面目でなければならぬ」常識の中で、私はその上、クロスオーバーしなければならぬとは。

先日、あるテレビの音楽番組の中で、ジャズピアニストの前田憲男は照れ笑いしながら司会の「クラシックとジャズのクロスオーバーとは？」との問いに、「文明は様々のものが交錯することによってつちかわれて来た。」と観客の前で云った。彼の照れ笑いの奥には、「冗談じゃあない、俺の文化はジャズだけだ。俺はただ、今クロスオーバーが流行っているから視聴率をあげるために、一役かってくれという主催者側の馬鹿気たにくらみにたまされただけだ。」といわんばかりであった。つまり、音楽だけに限らず、今や、自己の表現そのものが、既製の概念の中に引きこまれ、いざそこから抜け出すには、再び「表現へ」という、トートロジーの軌道に乗らねばならないのだ。

論理や一般性は、それが極端にまで突き進められると、その破綻の兆しを見せはじめる。クロスオーバーという造語も例にもれない。「不思議の国のアリス」は現実と虚構をすでに失効し、意味を支え、意味の根拠となり得るような現実はどこにもない。ナンセンスと狂気の世界である。自己を自己として証明すべきものは何もない。この狂気の世界に我々は生きているのだ。この宙吊りの世界に。マルセルデュシロンの「レディーマイド」が、意味概念の解体を語ると同時に、ポストモダンが建築言語を構築出来るのも、いわば宙吊りの現象||世界の両義性なのだ。

（株）大林組広島支店設計課分室

沢井建築設計事務所勤務



市民と住宅

五十二年卒

背尾 宜徳

昨今の四季の移り変わりの速さを考えてみるに、毎日の我々の仕事の意義と見比べてみる事が時々ある。

個々の建物や再開発のためのスケッチ等を四季の変化に関係なく、事務所に閉じこもって画いているわけだが、時々、いろいろな人から非常に素朴な質問を受ける。それは、次の点に尽すそれは、『住宅の現状の貧窮度を設計しているあなたは、どう考えているのか。』……………

しかし、この質問をあげせられた本人のジレンマは、本人個人だけのジレンマだけでなく、又、住宅だけに限られない。

我々の日々の活動は、建物の収支計画から実現可能な開発のための様々な手法を駆使し、様々な可能性を探るわけだが、常に付きまとうのは、それが社会的資産と成り得るかどうかという点である。しかし、つきつめての、社会的資産―それに係わる自分の生という問題は、様々なプロジェクトを手がけているスタッフ全員のジレンマとして共通している。又、我々の身近な公共建物も、政治力のレベルでの話題であり、特定に組織化されていない市民

の意見を取り入れる場合は、皆無と言つてよく、公共という言葉には、ほど遠い。

経済成長による社会事情の複雑化が、政治の肥大化をもたらし、組織化された民主主義の上に個人生活と政治生活のアンバランスが生じる、という図式が浮かんで、ため息は出るものの、そのため息だけでは、ジレンマは深まるばかりである。

しかし、このような、固定化された流通機構の中で、又、住宅政策が、景気刺激策として重視され、金融機関への依存が高まるという形で住宅建設が進められている中で、似たようなジレンマを感じている人々によって、新たな運動が盛り上がっている。それは、全国各地で行われているコーポラティブ方式による住宅建設で、市民社会と住宅を考える上に、注目を引く事実である。

この運動は、住宅需要者が、自ら建設協同組合を組織し、集合住宅を計画、建設するというものであり、特徴として、①ユーザーの要求を取り込んだ住宅の規模、間取、設備の住宅を入手できる。②住戸の販売経費や企業利潤等の中間マージンを減らし安価になる。③企画、建設過程での協力、共同が入居後のコミュニティ形式に役立つ等である。

実際、各地で建設が進んでいるわけ

だが、問題も多く、事業推進のためのノウハウが確立されていない事、企画者の意識だけが先行して、需要者の実態が追いつかない。又、組合に法人格がなく、現行の個人に対しての持家融資は、直接対象とならない。(大正十年制定の「住宅組合法」は、昭和二十五年設立の住宅金融公庫の個人持家融資にとつてかわられ、昭和四十六年に廃止。)これらの中には、市民運動的な方向を指向するものと、企業化を指向するものがあり、境界も判然としないし、また個人の結びつきの要因も、経済的利益の打算で集団に参加しているものがほとんどで、西欧の市民運動的ではない。(建設省コーポラティブ方式研究委員会中間報告・昭和五十二年九月。)

しかし、この運動に、開かれた制度の確立への芽ばえ、市民一人一人に託された参画の制度が見られないか。そのしくみの確立に、政治のあり方の、権力闘争の側面と現実問題処理機能の側面を識別できる足がかりとはならないか。ひいては、自らの生活が、政治権力にひきまわされることなく、住みやすく出来る事を考えられないか。季節の移り変わりとともに、考えているこのごろである。

都市建築研究所 勤務

今思う事

五十三年卒
市山 盟子

大学を卒業して、早くも一年が過ぎようとしています。今思えば、学生時代は何とのおんきに暮らしたことでしょう。と言って、社会に出た今も昔の癖で、のん気なところは変わりません。そこで、これを良い機会に、自分を見つめ、今からすべき事を自覚しようと思っています。

現在私は、建築指導課に配属され、直接確認申請の審査をしているわけではありませんが、建築基準法、都市計画法等の法律に囲まれて仕事をしています。この法律が曲者で、申請者にしてみれば、どうにか家を建てたい、どうせ建てるなら狭い土地を有効に使って、利益の大小がかかわればなおさらで、あの手の手の法のぬけ道の解釈がされ、我建築指導課の先輩達も、随分悩まされているようです。私も、一年がたとうとしているのですから、基準法なら任せとけと言いたいところですが、全くダメで、先輩の足元にも及ばず、とうてい胸を張ることなどできません。大学では、もちろん基準法を学びました。しかし、試験のため、単位のために、上面だけを勉強したせいで、社会では全く通用せずわからないことばかり、ということになってしま

いました。又、理屈ではわかっていても、実際に応用する段になると、どう使えばよいのかさっぱりという次第でした。例えば、居室の採光などは、試験の時、何度も計算した記憶がありますが、いざ、確認の図面を目の前にだされ、採光のチェックをしると言われたら、どう手をつけてよいのやらとまどってしまいました。今の私の仕事は、基準法第四十八条用途地域や、昨年新しく加わった第五十六条の二日影規制等の許可をする際に開催される建築審査会の事務ですが、この建築審査会という言葉さえ知りませんでした。今になって切実に思うことは、学生時代から将来のためを考えて、学んだ事は身につけ、勉強の基盤をつくっておくんだということでした。

こうして、じっくり自分を見つめていると、私のどこかに、「自分は女なのだから」という甘えがあるのに気がつきます。いつかは、建築の仕事から遠ざかる日が来るかもしれないのだから勉強したってしょうがないという逃げ腰な考えです。女はだめだと言われることに腹をたてる前に、まず自分から改め、努力せねばならないと実感しています。これからは、前向きに何でも吸収しようという意気込みで、一日も早く先輩達に追いつこうと思っています。

最初から終わりまで私事になってし

まって恐縮ですが、最後に、工大を卒業された女性の方々、色々なところで御活躍されていると思いますが、一度皆が集う機会をもってみてはいかがでしょうか。さそかしにぎやかで、楽しいものになると思います。

呉市役所建築指導課勤務

就職するにあたって

五十四年卒

木村 仁美

“もしも、私が家を建てたなら、小さな家を建てたでしょう……”

この歌の様に、単なる乙女チックな憧れと、小学校の時、算数が好きだったという、たったこれだけの理由で、建築の道めざして、工大に入ってきた私でした。

大学生になる前は、とてもうれしかったんです。何も拘束されない自由な生活。大学生になったら、あれもしょう、これもしょう、と考えただけで、口がにんまりとゆがんじゃってました。そして、幼稚園児みたいに、皆でワイワイキヤキヤ騒いではかりいた四年間。それは、もう、本当に楽しかったんです。

あっという間に卒業が目の前にやって来ました。

じゃあ、社会人になる前の気持ちってどうなんだろう？ はっきりわかん

いなあ。就職への抱負？ 今度は、大入る前みたい、いっぱい浮かないなあ。

ただひとつわかるのは、厳しい世界が待ち構えてるっていう事です。

だって、先輩からいつも、「お前ら学生のうちにイヤッていうほど遊んでおけよ。社会に出たら、したい事できないからな。」って聞かされてたから。

私は、もうちょっと、学生でいたいなって、甘い考えもったのんびりやさん。

だけど、就職を機に、与えられた環境の中で、私は、自分の緊張感を持ち続けていたいと思います。

そして、常に何か新しいものを求める冒険心と。

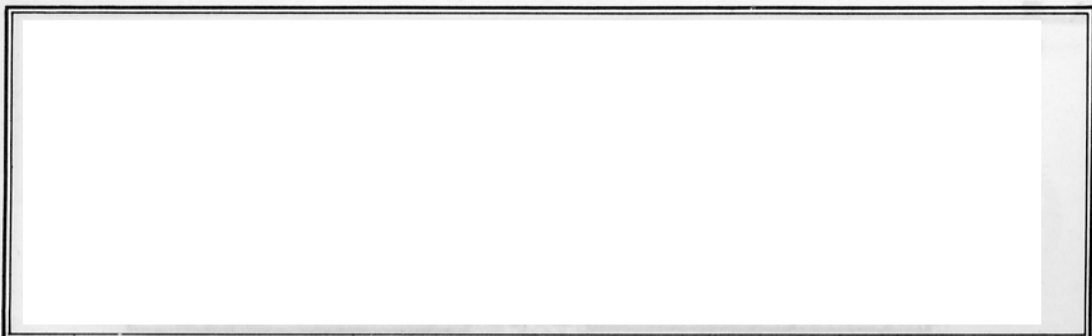
この二つを意識しながら、私は、高く飛びたち、強くはばきたいのです。決して、過度の期待を持たず、そして、決して絶望しないで進んでいこうと思います。

(株)共立ハウジング入社予定

学科別卒業生数の推移

S 53. 10 (現在)

卒業年	電子工学科	電気工学科	機械工学科	土木工学科	建築学科	経営工学科	年 計	備 考
38	103						103	短大
39	51	32					83	
41	48	32					80	
42	120	89					209	
43	100	84	120				304	
44	94	88	196	61	87		526	
45	137	137	246	121	200	102	943	
46	127	128	212	155	228	102	952	
47	132	124	241	123	223	124	967	
48	140	127	248	144	253	127	1,039	
49	87	125	197	103	182	129	823	
50	98	88	186	100	213	122	807	
51	103	113	170	119	239	89	833	
52	109	109	167	105	199	97	786	
53	92	101	175	123	214	108	813	
学科計	1,541	1,377	2,158	1,154	2,038	1,000	9,268	



第四回五三会コンペ入選発表

審査委員長

渡辺 武彦

課題「広島工業大学建築学科のアトリエ」の入選が、審査員（教官三名、卒業生五名、計八名）の厳正な審査に基づき下記の様に決定され、十一月三日、工科大学祭コンペ作品展示場に於て、発表されました。

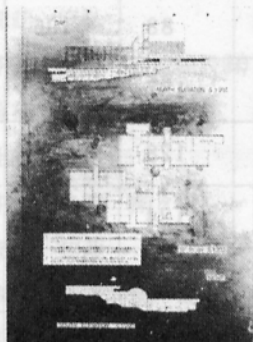
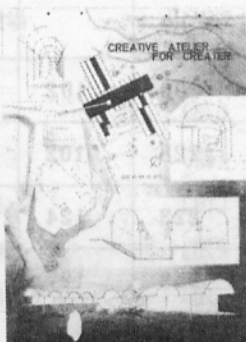
今回のコンペ課題については、過去三回のコンペの結果を反省し、検討を加え、規模・内容とも広範な課題を避け、なるべく身近な問題を提起し、又入選賞金を二十万円に上げ、より多くの応募者を期待しようと言う事で募集した結果、応募総数十点（卒業生チーム一点、在校生チーム九点）と昨年に比べ二倍となりました。

今回は、審査員の批評を展示場に於て掲示し、展示内容の充実も計りました。審査方法は、それぞれの審査員に持点を与え、作品のランクづけを行い、合計点により採点する方法をとりましたが、その結果、それぞれの作品についてほとんど差がなく、いかに審査員を悩ませたかがわかりただけだと思います。又、年々作品のレベルが高くなり力作が出品される中で、全般的に「コンペ慣れ」しているせい、か、主旨及び作品の表現方法がテクニクに走りすぎている感を受けました。又、今回は、はじめて卒業生チームの参加が得られた事で非常にうれしく思うと

同時に、五三会コンペ実行委員会も、課題、審査員及び審査の方法について検討を加え、増々魅力あるコンペにすべく努力致しますので、次回も会員の皆様の多数の参加を期待致します。

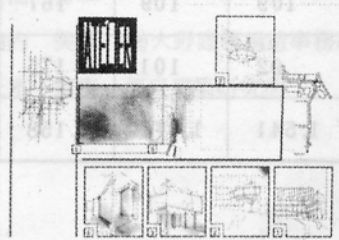
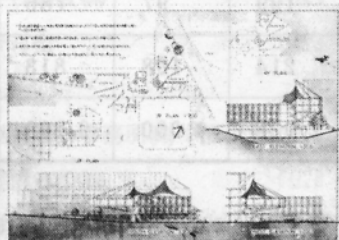
入選

吉雄 乗勝
一恭 久保
和義 北村
明義 金田
建森
恒江



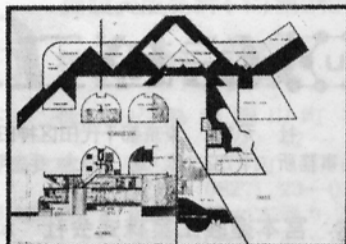
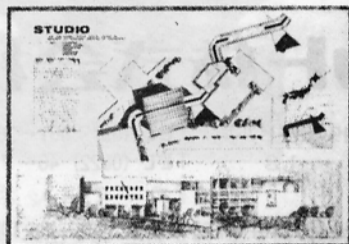
入選

河野 秀穂
康仁 池内
淳弘 土江
和憲 山本



入選

松原 秀範



52 年 度 決 算 報 告

○収 入	繰 越 金	541,269
	新会員会費	328,000
	会 員 会 費	119,325
	総 会 収 入	180,000
	広 告 料	620,000
	寄 付 金	0
	雑 収 入	4,426
計		1,793,020

○支 出	会 報 印 刷	522,000
	総 会 案 内	30,000
	郵 送 費	161,320
	会 議 費	84,860
	総 会 援 助 費	369,024
	活 動 強 化 費	50,600
	在 学 生 援 助 費	10,000
	コ ン ペ 費	211,250
	バ イ ト 費	50,000
	消耗品及び雑費	16,790
	その他(送別金)	20,000
	繰 越 予 定 金	267,176
計		1,793,020

53 年 度 予 算

○収 入	繰 越 金	267,176
	新会員会費	300,000
	会 員 会 費	150,000
	広 告 料	300,000
計		1,017,176

○支 出	会 報 印 刷	150,000
	総 会 案 内	50,000
	郵 送 費	108,000
	会 議 費	90,000
	総 会 援 助 費	125,000
	活 動 強 化 費	60,000
	在 学 生 援 助 費	27,840
	コ ン ペ 費	210,000
	バ イ ト 費	40,000
	消耗品及び雑費	70,000
	繰 越 予 定 金	76,336
計		1,017,176

会員へのお知らせ

◎ 会費納入のおねがい

五三会は建築学科卒業生全ての会でありますので、会費を納入されていない方は、1日も早く送金下さるようお願いいたします。なお、五三会で用意しました振替用紙を使用していただきますと、手数料がかかりませんので五三会の振替用紙をご利用下さい。

なお、入会金は千円、年間会費は千円です。

郵便局の口座番号は、広島28276

編集後記

この「五三会」会誌を刊行するに当たって、規模はどの位にしたらよいのか、内容をどういったものにするのか、といったことに頭を痛めた。結局、前年の記念特集号は別として、従来の会誌よりも規模増を図ることにした。また内容的には、第一期生（44年卒）から今春に卒業される人それぞれに寄稿して頂き、各年別卒業生の姿といったものが出るようにした。

編集の締切り日が近ずくとドタバタ戦争。多忙な仕事（本業）の合間にスポンサー集め、情報の収集など御協力下さいました方々、ありがとうございました。

特に「五三会」会誌のために広告を出稿して下さいましたスポンサー各社、並びに原稿をお寄せ頂いた先生に対して衷心よりお礼申し上げます。

最後に、この会報が広工大卒業生の間をより一層強く結び付けるものとなり得ますよう期待するとともに、会員皆さんの御活躍を願っております。

「五三会」第6号編集委員

徳 清 秀 夫
知 野 吉 春
吉 川 澄 生
坂 本 和 人
小 田 正 志
山 下 高 美
山 本 富 雄

広島工業大学建築学科同窓会会誌

第 6 号

「五 三 会」昭和54年版

編集責任者 徳 清 秀 夫

発行責任者 管 原 辰 幸

印 刷 所 大日本印刷株式会社

発 行 昭和54年3月20日

『いつ^みかい

『いづみ会』

広島工業大学建築学科同窓会